このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、遠い祖先の心や、郷里のぬくもりを少しでも感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

松浦の民話⑯

かっぱ石と喜左衛門（きざえもん）

昔、西木場の坂瀬川には、かっぱ一族が住んでいました。

かっぱは、三つ四つの子どもぐらいの大きさで、背中に亀のような甲羅を付け、手足の肌はうなぎのようにつるつるとしていました。川や池を住みかとしていたので、指の間には水かきがありました。頭のてっぺんには、水が入っている皿のようなものがあり、その水がある間はすごい力持ちで、その上、いろいろに化ける術まで使う。

回る子どもたちをさらっては、深い水底へと引っ張り込んでしまうのです。

「あの川で泳いだらでけん。かっぱからしりごば抜かるるとぞ。」

おばばにやかましく言われても、汗まみれの子どもたちは、川へ水遊びにやって来て、しりごを抜かれる者が絶えませんでした。

子どもだけでなく、大人もよくかっぱにだまされました。かっぱは相撲が大好きで、住みかのそばを村人が一人で通ると、ひょいと組み付いてきました。

「こぎゃんちび、何のことがあるか。」

と思って相手をすると、これがなかなか強い。体を持ち上げるようにすると、ぬるぬるつるつるでなかなかつかめません。やっとで投げ飛ばすと、目の前にまた一匹のかっぱが出てきて組みついてきます。それを投げ飛ばすとまた一匹、一匹ときりがありません。もうめちゃくちゃに暴れまわっているところへ、ほかの人が通りかかって、

「一人で何ばしよっとな。」

と、不審がられました。ほかの人には、かっぱの姿は見えないのでした。

ひどくなるばかりの悪さに、たまりかねた村人たちは、村一番のごうけつ、喜左衛門にかっぱ退治を頼みに行きました。

「噂は聞いとったが、そぎゃん悪さばしよるとならもう勘弁せん。」

と、喜左衛門は早速、夕暮れになるのを待って、かっぱの大将の住むという坂瀬川へ出かけました。

「かっぱは神通力があるちゅうせん、油断はならん。」

喜左衛門は力も強かったが、知恵もなかなかの人だったから、かっぱに悟られないように百姓の身なりをし、鎌を腰に差し、草刈りに行くふりをして、たった一人で川沿いを歩いていました。しばらく行くと、暗くなりかけた川口あたりに、何やら白いものがゆらゆらしています。近寄ってよく見ると、大きな魚がぷかぷかと浮いているではありませんか。

「やった。」

思わず飛び込んで、捕まえようとしましたが、そこは喜左衛門。

「待てよ。こりゃきっと、かっぱのだましよるに違いなか。うっかり入ると川へ引きずり込まれるぞ。」

ここらのかっぱは、ときどき飛び石や魚に化けて、人を川へ引っ張り込むことがある、というか聞いたのを思い出しました。そこで知らん顔をして、草むらに隠してあった網を出すと、ぷかぷか浮いている魚をさっとすくい上げました。網の中でばたばた暴れる魚を押さえ、腰の鎌を引き抜くと、

「こりゃ、見事なすずきじゃ。頭はここからちょきんと切って、吸いもんにしゅう。片ひらは刺し身。後は照り焼きにでもしゅうか。今夜はごちそうばい。」

と、ひとりごとを言いました。

すずきに化けたかっぱは、うろたえました。

「こりゃあ、大ごと。こんまんまじゃ、殺されてしまう。」

思わず正体を現し、必死に逃げようとしましたが、網が絡みついて思うようにいきません。喜左衛門はすかさず、ぎゅっと首根っこを押さえつけ、頭をさかさまにして、皿の水をこぼしてしまいました。

「こらぁっ。村のもんに悪さばっかりするのはお前たちじゃな。村のもんがどぎゃん困っとるか知っとるか。もう許さん。俺が息の根ば止めてやる。覚悟せろ。」

と、どなりつけました。

神通力がなくなったかっぱは、ぶるぶる震えながら、

「命だけはお助けください。もう二度と悪さはしません。」

と手を合わせて、何度も何度も頼むのでした。

喜左衛門は力は強いけれど、心も優しい人だったので、ちょっとかわいそうになりました。でもこのまま逃がして、また村を荒らされてはたまりません。どうしたらいいかと周りを見回すと、川のそばの大きな石が目につきました。

「そぎゃん言うなら、命だけは助けてやろう。だが一つ約束がある。ここに、太か石のある。こればここに置くせん、この石の腐るまで、お前たち一族は一匹でも、この川から出ちゃならん。どうじゃ、約束ば守らるるか。」

と、かっぱをにらみつけながら言いました。

「はい。守ります。一族の者にも守らせますから、どうぞ命だけは…。」

と、かっぱが涙を流して頼むので、押さえている手を緩めてやりました。坂瀬川の淵に飛び込んだかっぱは、川の底深くもぐり、それっきり見かけないようになりました。かっぱも約束を守っているのでしょう。それからは、村の人々も安心して暮らせるようになり、作物もたくさんできるようになりました。

今も坂瀬川に残る約束の石、いつまでも腐れずにあってほしいものですね。でも、このごろよくその石の下の方に、枯れ草やごみが積み重ねて置いてあるそうです。たぶん、そろそろ村へ来たくなったかっぱが、石を腐らせたいと思って、置くのではないかというわさです。

川や堤で泳ぐと、もしかして、かっぱが出てくるかもしれないから気をつけましょうね。

（御厨町西木場）

わたしたちの郷土 ―66巻―

中世の松浦（32）鷹島海底遺跡

船舶の停泊具である「いかり」は、石の重みを利用した「石碇」から、木と石を組み合わせた「木石碇」、硬くて比重の大きい木を利用した「木碇」、それから「鉄錨」へと発展します。

「碇石」はこの「木石碇」に使用された石製品になります。細長く角柱状に形成され、碇全体の比重を大きくし、海底に沈ませやすくするとともに、アンカーストックとして碇の爪が海底に安定して突き刺さりやすくするための機能を持ったものです。国内では約70点が確認されており、博多湾を中心に、北部九州の玄界灘沿岸で多く発見されています。「蒙古碇石」として神社などに奉納されている例もあり、福岡市内では櫛田神社や筥崎宮の境内などで身近に見ることができます。

文永・弘安の役における元軍の航路で多くの碇石が発見されていることや、『蒙古襲来絵詞』に描かれている元軍の碇などを参考に「蒙古碇石」として限定する説、全てが蒙古襲来とは限らないが、博多湾周辺からの発見が多いことから「蒙古碇石」である可能性が高いとする説、宋代を中心とした中国からの交易船に伴うものとする説などがあります。最近はこの交易船の碇とする考え方が主流を占めています。

▲筥崎宮の「蒙古碇石」
（福岡市の文化財より））

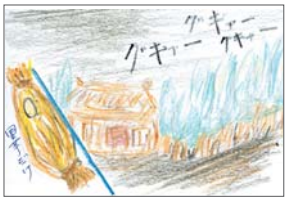
松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「**伍作どんとこうぞう鳥のかか**」のイラストに、3通の応募がありました。
ご応募ありがとうございました。

【最優秀賞】
大石歩実ちゃん（星鹿・北久保、10）
「月明かりだけの薄暗い山道の様子や伍作どんが恐怖のあまり走って逃げていく姿が用紙いっぱい描いてあります。また、物語に出てくる『十三夜ぐらいの月』までしっかりと表現してありますね」（はま）

【優秀賞】
ペンネーム　Aちゃん
（星鹿・大石、11）
「化け物のような泣き声の主の姿を目と口と手だけで上手に表現していますね」（はま）



【優秀賞】前田サツキさん
（福島・日の浦、70）
「里芋だけになってしまった『つと』を見た伍作さんの驚いた表情が想像できるようですね」（はま）

■あなたの力作を募集！　―民話の感想画募集―

右の民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上、左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介します。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。どなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの（色鉛筆の場合は濃く塗ってください）。

【必要事項】住所、氏名（ふりがな）、電話番号、年齢、職業（学校名）

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。

なお、いただいた個人情報は民話コーナー以外には使用しません。

【応募締切】7月11日（月）必着

【応募・問合せ先】
〒859-4598　松浦市志佐町里免365番地
松浦市まちづくり推進課　秘書広報係
☎0956-72-1111　Eメール=hisyo@city.matsuura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。